

公孫勝は部屋の窓から、昇りつつある朝日を眺めていた。隣の部屋では、宋雪華がまだ眠りに就いているはずだった。おおよそのことは、九天玄女の手の者から聞いていた。だが娘達から聞いた話では、それを遥かに超えた非道な仕打ちだった。

こんなことが罷り通っているのだろうか。公孫勝は嘆息した。罪がないどころか、知恵と努力で人々に希望を与えてきた者達を、こんな悪虐な方法で排除しようとする。それも市井の商人だけでなく、仮にも大きな城郭の長が加担してだった。自分達の欲のためだけに。

「この宋という国では、こんなことは珍しくはないのだろうか」
思わず声にして、公孫勝は呟いていた。

確かに、不正や強欲は巷に溢れていた。そしてそれを当然とする風潮が、今のこの国には在る。だいたい、国の頂点にいる天子からしてその代表のようであった。今の天子、八代皇帝徽宗はもともと皇帝になる器でもなかったし、本人も皇帝になれるなどとは思ってもいなかったのだ。たまたま、七代皇帝の哲宗が肺の病で急死した後の混乱の中、向太后と廷臣の曾布によって祭り上げられただけの皇帝だった。その理由は、端王と呼ばれていた頃の徽宗が趣味の書画骨董に沈溺し、政治には興味を持っていなかったためだった。即ち、廷臣達にとって、また政治の実権を手放したくない者達にとって、これほど都合な後継者は他にいなかったのだ。だから今でも、徽宗は己のやりたいことだけに没頭している。宰相の蔡京もそれを奨励していた。趣味の方に目を向けさせ、自分達の好きなように政治を進めたいからだ。こんなことでこの国はどうなっていくのだろうか。公孫勝は、怒りとも諦めともつかない、何ともやるせない思いに駆られるのだった。

戸を叩く音が聞こえた。それに続いて、遠慮がちな声が聞こえた。
「黄玉です」

公孫勝は戸を開けて、黄玉を部屋に迎え入れた。

「どうしたのだ」

公孫勝が優しく訊いた。

「お願いがあつて来ました」

黄玉は戸から少し入ったところに立ち尽くし、縊るような目で公孫勝を見詰めていた。白目が充血し赤みを帯び、瞼もこころなし腫れていた。この娘は泣き続けていたのだろう。そう思うと、公孫勝の心は針に刺されたような痛みを覚えた。

「願ひとは」

公孫勝は、出来るだけ淡々とした口調で訊いた。中途半端な同情は、かえつてこの娘を苦しめるだけだ。公孫勝はそう考えていた。

黄玉は少しの間迷っている様子だったが、思い切ったように着ていた戦袍に手をかけた。

黄玉は內衣もとり、美しい裸身を晒した。頬を少し紅潮させてはいるが、その目は真っ直ぐに公孫勝の目を見ていた。

「私の皮を、使っていただけませんか」

黄玉の声は静かなものだった。朝日が窓から差し込み、黄玉の裸身を照らした。天女のような。公孫勝は初めて賛嘆した。そして、それでも動かない自らの心に、幽かな虚しさも感じたのだった。

二句※を過ぎた頃に、推されて一族の長になった。公孫勝は辞退し続けたが、それは叶わなかった。五千人近くの集団だった。世間の目を避け、ひっそりと暮らしていた集団だった。仕方なく、公孫勝は一族の生活のために奔走した。そのうち、世の中から隔絶した地を捜し出し、そこに定住するようになった。今では二千戸を超える家が建ち、自給自足に近い生活を送ることが出来るまでになった。一族と言っても、血縁関係にある者は少なかった。しかし、遠い祖先から共に暮らし、共に信じ合ってきた仲間だった。その特殊技能と信念のために、遠く秦の時代から迫害を受け辛酸を嘗めさせられてきた一族だったが、公孫勝はその信念に一遍の曇りも感じてはいなかった。自分達の信念は間違っていない。公孫勝はそう思い続けてきた。

※二句 二十歳。

そうは言っても、一族のためだけに自分の人生を費やしたくはなかった。それで、市井の医師としての道を選んだ。学んでみると、自分に合っていることが分かった。それでますます医に励んだ。色々な手当てを考え、それを実証していく。病の本質を探究し、対抗策を捜し出す。そんなことに没頭している時が、公孫勝にとって一番充実した時間だった。しかし、いいことばかりではなかった。医を修める過程で、必然的に遭遇する死との対峙。直視せざるを得ない、病や外傷の惨たらしさ。それらは、徐々に公孫勝の心を蝕んでいった。どんなに美しい男女を見ても、所詮それは皮の外側だけのことだった。皮を剥いてしまえば、どんな者でも大差はなかった。富める者、貧しい者。高貴な者、下賤な者。美しい者、醜い者。賢い者、愚かな者。一皮剥いてしまえば、そこには何のの違いもなかった。強いて違いを見付けるとすれば、男と女、大人と子供、肥満と痩身、せいぜいそんな程度だった。だから公孫勝は、女色に心を奪われたことがなかった。もともと淡白な方だったのだろうが、医に専念するようになってからは、ほとんど心を動かすことがなかった。

「皮を使ってくれとは」

公孫勝の冷たさを含んだ言葉にも、黄玉は怯まなかった。

「言葉のとおりです。わたしの皮を雪華姉様に……」

公孫勝は、困惑を隠せなかった。

「昨夜言っただはずだ。成功の見込みは少ないとな」

「構いません。一分でも見込みがあるのなら、賭けてみる価値があります」

「だが、合うことは稀なのだ」

「やってみなければ分からないではありませんか」

「おまえの皮の色は合うと思う。宋雪華の皮は、その名のとおり雪のように白い。おまえの皮は雪と言うより氷に近いが、確かに理想的な皮の相性だろう。だが、色だけではどうしようもないのだ」

公孫勝がそう諭しても、黄玉は退かなかった。

「公孫勝様は、血が合うことが大事だと言っておられました。ならば、

せめて血が合うかどうかだけでも試してください」

黄玉の目は真剣だった。一時の激情に駆られているのでもなさそうだった。

「血が合うことも少ないのだ」

「血が合わねば諦めます。どうか、試しだけでも」

公孫勝は根負けした。血が合うことは決して多いものではない。血が合わないことが分かれば、いかに強情なこの娘も諦めるだろう。公孫勝はそう期待した。

「分かった。試してみよう」

黄玉の顔が喜びで輝いた。

「その前に、とにかく衣きを着けるのだ。裸裸でいる必要はない」

公孫勝が言うと、黄玉は今気付いたような顔をして緑の戦袍を身に着けた。恥じらいの表情を見せていた。よほどの決心だったのだろう。

公孫勝は、この娘達の心の美しさにあらためて感動を覚えた。

二人は隣の、雪華が休んでいる部屋の戸を開けた。雪華はまだ目覚めていなかった。公孫勝は、雪華の小指の腹を小さな刃やで刺した。次いで、黄玉にも同じように刃で刺した。そこから血を絞り出し、雪華の血と混ぜ合わせた。三百ほど数えた後、公孫勝が混ぜ合わせた血の状態を見た。

「どうでしょうか」

黄玉の言葉は、祈りのようにも聞こえた。

公孫勝は口を開かなかった。黄玉は恐る恐る混ぜ合わせた血を覗き込んだ。何かが滴った。血は、混ぜ合わせる前とほとんど変わっていないかった。少なくとも黄玉の目には。

「残念だが、血は合うようだな」

公孫勝の顔は、苦虫くちゅうを噛み潰したようだった。

「では、していただけなのですわね」

公孫勝は答えなかった。

「約束です。公孫勝様」

黄玉がはっきりと言った。

「分かった。私の負けだ」

公孫勝はそう言って、溜息をついた。黄玉は嬉しそうに顔を輝かせ、公孫勝の持参した薬や医の道具を取りに行った。

「黄玉」

公孫勝が、初めて黄玉を名で呼んだ。

「はい」

黄玉が振り返った。

「李逵殿は知っているのか」

黄玉は首を横に振った。

「他の仲間は」

「誰にも話しておりません。わたしの一存です」

「そうか。今更翻意させようとは思わぬが、おまえが抜けると砦の守りに支障があるのではないか」

「大丈夫です。命さえあれば、わたしは戦います。傷をしつかり縫っていたらすぐにでも」

公孫勝は再び溜息をついた。

「そんなことをしてもらっては傷が開く。開いた傷を再び縫っても、うまく付くことは少ないのだ。まあいい。おまえの代わりは私がするしかないだろう」

「わたしは戦えます。皆に迷惑をかけるわけにはいきません」

「そう言っていられるのも今のうちだけだ。これを呑むのだ。眠り薬に特別な薬を調合してある」

公孫勝が粉薬の入った包みを取り出した。

「特別な薬……」

黄玉が訊いた。

「女真族の地に生える白い花の根だ。意識が薄くなり、身体の動きもとれなくなる。痛みで動かれると刃が滑る」

※白い花 朝鮮朝顔。ダッラのこと。根に催眠、幻覚作用物質を含む。

黄玉は、公孫勝に頭を下げた。

「薬は無用です。このままです。お願いします」

公孫勝は呆れたように言った。

「莫迦なことを言うな。戦で斬られるのはわけが違う。戦では気持ち昂ぶっているから、あまり痛みを感じずに済むのだ。これは戦や普通の怪我とは違う。動かれると、成功の可能性が低くなる。血の管を処理するのは、細かい作業なのだ」

「動かずに耐えてみせます」

「どうしてそんなことに拘る」

「雪華姉様は、意識のあるうちに身を焼かれました。その数分の一でもいいから、わたしは耐えてみたいのです」

「莫迦なことを……」

そう言いながら公孫勝は、何か説明のしようがない感動に胸を震わせた。久しく覚えのない心の震えだった。何という結びつきだろう。何という強い心だろう。人の美しさに心を動かされなかった公孫勝が今、無垢な魂の前に心を震わせていた。何という美しい娘達だ。この娘達のために、私は全力を尽くそう。公孫勝の心に、生まれて初めて大きな灯が点った。

•••

石勇が駆けて来るのが見えた。李達は石積みの手を休め、砦の後方を確かめた。何人かが砦の裏門に立っている。一人は女で、黒い道服を身着けている。李達はすぐに分かった。九天玄女だった。石勇が息をきらせて李達の前にやって来た。※道服 道教の法衣。

「黒旋風の兄貴、変な小母さん達が来ています。通せと言ってますが、どうしましょう」

李達はそれに答えず、裏門に向けて走っていった。

九天玄女が五人の供を連れて、裏門の向こうで焦れていた。

「天殺の星よ、随分と部下の教育が出来ておるようじゃな」

李達は、いきなり皮肉を浴びせられた。

「済みません。玄女様のことは聞かせておりませんでした。粗相があ

ったとは思いますが、勘弁してやってください」

李逵は跪拝※で九天玄女を迎えた。※跪拝 膝をつけてする礼。

「まあ、よい。だが、あの者にはまず、言葉遣いから教えねばならぬな。あんな態度では見張りも勤まらぬ」

「よく言っておきます。玄女様が来てくださるとは、思ってもいませんでした。お出迎えもせず、申しわけありませんでした」

九天玄女が笑いこけた。

「何を畏まっておる。おまえには似合わんから、止めた方がよい」

李逵はますます恐縮したようだった。

「さあ、宋雪華のもとへ案内してくれぬか」

九天玄女はそう言って、李逵を置いて砦の中に入っていった。

「玄女様、嬢さんは……」

九天玄女は李逵の言葉を遮った。

「分かっている。だが、いつまでも寝ておるわけにはいかん。太原府が動きだしておる。猶予は、あまりない」

「何日ほど」

李逵が訊いた。

「二三日とっておけ」

九天玄女がきっぱりと言った。

李逵はその言葉を信じた。九天玄女の持つ情報網は、驚くほど広範囲で正確だった。李逵は三年前から、いやというほど知らされてきた。九天玄女がこんなふうには断言した時は、まず間違いのないものだと思っただ方がよい。

「開封府は」

最も気にかかることを、李逵は訊いた。

「まだ報せが行っていない。だが、黄文柄は自分だけでは手に余ると考えておる。時間はかかるかもしれぬが、開封府禁軍は来るものと思っておけ」

「分かりました。準備しておきます」

李逵はそう言って頭を下げた。やはり、来るか。李逵はあらためて

これからの苦難の道を想像した。逃げ延びるのは、いや、生き延びるのは極めて困難なことだと思えた。いざとなれば。李逵は最悪の場合も考えた。全員が自決。いや、それは出来ない。嬢さんとあの若者達を死なすことは出来ない。やはり、最後の最後まで戦うしかない。まだ、嬢さんを遠くには運べない。いかに残月が優れた馬でも、今の嬢さんを安全に運ぶことは出来ないだろう。あの傷では、とても残月の疾駆には耐えられそうにない。やはり、儂等か。李逵はそう思った。蘇源は漢として死んだ。見事な死に様だった。陳達、儂等も蘇源のように散ってみようか。

李逵はそう心の中で思った。

・
・
・

部屋に入ると、公孫勝が雪華の牀の端に座り込んでいた。目は充血し、肩を落とし、両手で顔を覆っていた。李逵の背後に九天玄女をみるとめると、牀から立ち上がり礼を執った。

「玄女様、思ったより早いお着きで」

公孫勝の声には力が見られなかった。

九天玄女が李逵の前に出た。

「入雲竜、天間の星よ。己が総ての力を使ったな」

公孫勝は九天玄女に微笑んだ。

「はい、私の総てを」

「ならば、この娘の心配はせずともよいな。おまえがその能力の総てを出したというのなら、成功は間違いないことだろう」

「私の力ではありません。あの娘、黄玉のおかげです。黄玉は、実によく耐えました。人に出来ることを超えていた。私には、そう述べるしかありません」

李逵が驚いた顔をした。

「黄玉、まさか……」

「李逵殿、そのまさかだ」

公孫勝はそう言って、李逵と九天玄女を隣の部屋に導いた。

部屋の隅の牀に、黄玉が横たわっていた。長い髪は乱れ、汗で汚れてはいたが、黄玉の目は輝いていた。

「李逵様、わたしは耐えることが出来ました。公孫勝様のおかげです。公孫勝様は、わたしのわがままをきいてくださり、そのおかげで、わたしは姉様の役に立つことが出来そうです」

痛みのせいか、黄玉は時折言葉を詰まらせた。

李逵は、胸が締め付けられるような思いに駆られた。

できれば自分が、黄玉に代わって皮をやりたかった。だが男で、しかもこんな黒く薄汚れた皮を、雪華にやることなど出来なかった。それは、聞起や陳統でも同じことだった。聞起は、男としては色白で、美男とさえ言えるが、それでも男と女の皮は違う。曹瑛の皮の色は、微妙に違うように思える。やはり、黄玉。それしかなかったのだろう。そう頭では思えても、やはり李逵には辛いことだった。雪華のためには、これでいいのだろうと思う。公孫勝が、以前から皮を移して火傷の痕を治していたのは知っていた。それが、いつもうまくいくとは限らないことも知っていた。雪華の惨状を見て、すぐに頭に浮かんだのが公孫勝だった。雪華のために、李逵はこれを望んだはずだった。だが今、牀に横たわっている黄玉を見ると、本当にこれでよかったのかと、自責の念に駆られるのだった。

「李逵様、これでよいのです。わたしが望み、公孫勝様が叶えてくれた。これ以上のことはありません」

黄玉の言葉は、まるで李逵の心を読んだかのようなようだった。

九天玄女が、おもむろに口を開いた。

「黄玉とやら、正しく天貴の星よな。おまえのその思い、その心、人が持ち得る最も貴いものの一つと言えよう。おまえは天英の星と共に、常に天魁の星を護る宿命なのだ。天魁の星、宋雪華と共に、おまえは駆け抜けるのだ。この誤った世を糺すために」

黄玉は何を言われているのか分からないという顔をしたが、雪華を護るのが自分の宿命だと言われたことは理解した。

「はい、命に換えて」

九天玄女は満足そうに頷いた。

「黄玉、終わったことは仕方がない。だがな、おまえが抜けると儂の計算が狂ってしまう。おまえを頼りにしていたのだ」

李逵が困り顔で言った。

「わたしは戦えます。明日には起きだすつもりです」

公孫勝がそれを遮った。

「黄玉、五日は安静にしているのだ。傷が破れると、治すのは難しいのだ。戦うのを許すわけにはいかん」

黄玉はなおも言い募ろうとしたが、公孫勝の目を見て口を閉じた。厳しく、そして優しい目だった。この人には逆らえない。黄玉の心がそう告げていた。

「入雲竜、おまえの出番だ」

九天玄女がそう告げた。どことなく楽しそうな口調だった。

「李逵殿、黄玉の代わりは私が」

「公孫勝殿が……。願ってもないことだが、本当によいのですか」

九天玄女が口を挟んだ。

「任せればよい。こういう守城戦には、この入雲竜が適任だ。というのはな」

公孫勝が九天玄女を遮った。

「玄女様、私から話します」

「そうか、それがいいだろうな。この者達はもう、おまえの仲間のようになものだ。隠しごとはない方がよい」

公孫勝は、あらためて李逵と黄玉を見詰めた。

「李逵殿、黄玉。いやでなければ、私の話を聞いてほしい」

「いやなわけがない。公孫勝殿は儂等の恩人。いや、それ以上のものだ。儂は三歳前、初めて会った時から気にかかっておった。是非聞かせてもらいたい」

李逵がそう言って礼を執った。

黄玉は口を開かなかったが、その視線は食い入るように公孫勝に注

がれていた。

「私は……」

公孫勝が語り始めた。

「いや、私達は墨家の末裔なのです」

李逵が唸るような溜息をついた。

「墨家といえ、もうなくなつたものと思つておつた」

「開祖、墨翟様は魯国※の出でした。墨翟様は、いわれのない罪で刺青をされ、それで人々から差別を受け、自らを墨家と呼んだのです。墨翟様は、始め儒家※の思想を学びました。だが、差別を受け蔑まれていた墨翟様にとって、儒家の思想はあまりに観念的すぎる。そして、支配する者に都合がよすぎる。そう思われたのです」

※墨翟 墨家の開祖。前五世紀半ばから四世紀前半。

※魯国 春秋戦国時代の国。

※儒家 春秋時代に孔子が興した儒教の学派。

「それはそうだろうな。儒家の教えでは、目上に逆らつてはならぬ、親の葬儀は大々的にか、喪は三年だとか、あれをするなこれを行えとか、とにかく堅苦しい指図ばかりだ。民を抑えておきたい為政者にとって、これほど都合のいい教えはないからな」

李逵が興奮気味に話した。

「李逵殿、私もそう思う。儒家も孔子様が興した頃は、こんなふうではなかつたのだと思う。だが長い時を経て、儒家がその思想自体を生業とし、時の権力に擦り寄つて永らえた結果、民にとっては枷にしか思えないものになつてしまつたのだと思う。これは何も、儒家に限つてのことではない。秦※にとつての法家※も同じようなものだ。だから墨翟様は、儒家に反論し兼愛を説いた。たとえば戦だ。もしもそれぞれの国の指導者が、人を差別しない兼愛の心を持つていたら、他国を攻めるといふことは、自らを攻めるといふことと同じだと気付くだろう。他者よりいい思いをしたい。自分だけがよければそれでいい。そのような者は、別愛の心を持つ者と言える。墨翟様はそう説いたのだ。自分と同じように他者を愛すれば、深刻な争いなど起きない

だろう。天下の害は別愛の心から生じる。墨翟様はそう考えたのだ」

※秦 戦国時代を終わらせ統一した国。前221年始皇帝が築いた。

※法家 韓非子が興した。法で国をまとめようとした学派。

「愛とは」

黄玉がぼつりと訊いた。

「大切に思う心のことだ」

公孫勝が、そう答えて微笑みかけた。黄玉の顔が、花が開いたように輝いた。

「王安石もな」

九天玄女が口を開いた。

「新法などと言って、いかにも民のために行ったと思われてはいるが、その根っ子は為政者のためのものだった。朝廷の財務が立ち行かなくなったから新法を作っただけの話だ。民を救うためではない。民のために少しは役立ったのは、青苗法ぐらいのものだ。保甲法も、民に自助努力を促すという点では、よかったと言えるかもしれぬな」

李逵が恐る恐る訊いた。

※青苗法 種蒔きの時に種籾等を低利で貸与し、収穫後に返済させる法。

「玄女様。王安石様はあなたのお父上では」

「そうだ。だがな、父とはいえ間違いは間違いなのだ。儒家から見ればとんでもない不孝だがな。確かに私は王安石の娘だ。母は胡姫だがな」

※胡姫 胡人の遊女。九天玄女の場合はペルシヤ人。

それで、九天玄女の瞳が碧色をしているのか。そして、どこか人間離れた容顔。年齢を感じさせない物腰。なるほど西域人の血が混じっていると分かれば納得出来る。李逵はそう思った。

九天玄女は続けた。

「一時は私も、父に夢を抱いたことがあった。そのために、父の手足となつて勤めたこともあった。父が科挙に及第した時の宴席で、父は母を見初めたという。その後何度かの逢瀬の末、母は私を身籠った。だが、科挙及第の進士と、胡姫が結ばれるはずもあるまい。ましてや、

父は及第者中第四位という優秀な進士だったのだ。母は私を産む前に、父のもとを去った。私は江寧府※で生まれた」

※江寧府 揚子江沿いの都市。現在の南京。

「江寧府といえは」

李達の声だった。

「そう、父の故郷だ。母は死ぬまでそこで暮らしていた。熙寧三年※、父王安石は宰相となった。神宗の御世だ。父はまだ五十で、神宗を助け宋という国の立て直しを図ったのだ。新法でな。私はその翌年、父に会いに行ったのだ。私は二十七だった。父が宰相になったと聞いて、母が初めて父のことを打ち明けてくれたのだ。幼い頃から、とりたてて働いていたわけでもない母が、どうして自分にこれほどの学問を授けてくれたのか疑問だったが、それを聞いて分かったのだ。父は、歳毎にかなりの銀を母に贈ってくれていたのだ。そして、私に学を修めさせたのだ」※熙寧三年 西暦一〇七〇年。

「王安石様は、お母上をその……愛していたのですね」

黄玉だった。

九天玄女は黄玉の目を見詰めたが、結局その問いには答えなかった。「私はいても立ってもいられなかった。学問は一通り修めた。ある程度の自信もあった。それを役立てたい。そう思っていたところに、父の話だった。私は開封府に行った。そして、何とか父に会えたのだ。父は私のことを知っていた。無論、学問を勧めたのは父だし、銀を運んでいた父の従者から、私のことも聞いていたようだった。父は仕方ないという顔で、私を置いてくれた。食客としてだったがな。まさか、父娘などと名乗りを上げることも出来まい。そうして私は、父のもとで様々なことに手を染めた。諜報、謀略、時には暗殺までもな。おまえ達も廷臣達の汚さは知っておろう。真にな、あそこは伏魔殿そのものだった。新法が全容を見せ始めると、廷臣達はそれに反対する者が多くなってきた。というのも、新法の中には募役法※のように、旧来負担を逃れていた特権階級の者達にも、国防の負担をさせるというものがあったからな。均輸法※にしても、大商人や甘い汁を吸っていた

者達にとっては、目障りなものだったに違いない。そうした者達が、よってたかつて新法潰しに動いたのだ。私は父の窮状を見かねて、反対派の者達の粛清に動いた。父もそれを見て見ぬ振りをしていった。しかしな、粛清といっても所詮は暗殺だ。大物には手が出せない。精々悪徳商人や、高官の手下程度の者にしか手が届かなかった。もちろん、狙ったら狙われる。さすがに父にまでは、敵も手が出せない。そこで私達、父の手足が狙われた。私と同じような働きをしていた者が次々と闇に葬られてゆくなか、私を含め、一部の者が生き残った。それがこの者達の父母だ」

そう言って、九天玄女は供の五人を見渡した。

※募役法 国防費を保有資産に応じて徴収する法。

※均輸法 国が物資調達をし、物価の安定を図ろうとした法。

「そうか、どうりで普通の者達には見えなかったが、先代からの諜者だったというわけか」

李逵が一人で納得していた。

「そのうち、司馬光※だけでなく蘇軾※までも反対派に廻り、ついに熙寧七年辞職に追い込まれたのだ。次の歳に一旦宰相に復職したが、やはり居場所がなく、すぐに引退し江寧府に隠棲した。母とも会ったようだった。それだけは、今でもありがたく思っている。父の下にいた三年、幸せでなかったとは言わないが、心の休まる日はなかった。謀略と暗殺の日々だったのだ。父の辞職とともに、私も開封府を離れた。この者達を連れてな。もともとは父の子飼いの諜者だったのだが、父が職を離れた時に、全員を私に預けたのだ。その際父からは、有り余るほどの銀をも預けられた。父は私に、何かを期待していたのだろう。今となっては、もう聞くことは出来ないがな」

※司馬光 旧法党の中心的政治家。神宗の崩御後宰相となる。

※蘇軾 北宋を代表する士大夫。詩文書画に優れる。

「遺志を継ぐということかな」

李逵がぼそりと言った。

「天殺の星よ。父も分かったのだと思う。上からの改革など出来ない

のだと。天子が天子でいる限り、本当の改革など出来ないのだ。私も、開封府を出て野に下り、追っ手から逃れるうちに分かったのだ。人が天の子などと称し、民を螻蟻※のよう扱おう。そんな仕組みを残したまま、真の改革など出来るはずがないのだ。人は人、それ以上のものでもなく、それ以下のものでもない。天の子と言うなら、それは生まれや立場で決まるものではなく、その者の思いや行いで決まるものなのだ。それは、人以下になるのも同じことだ」

「私もそう思う。私達墨家の生き残りは、儒家や時の権力者から様々な圧迫を受けてきた。儒家にとっては私達の兼愛の思想が、権力者にとっては非攻と守城の特殊技術が邪魔なものに思えたのだろう。それゆえ、私達は世間から身を隠し、ほとんど自給自足の暮らしを送ってきた。それで、墨家は既にないものと思われてきたのだ。だから私は、九天玄女様が言われることがよく分かる。こうした支配機構を残したままでは、民のための改革など出来はしないのだ」

公孫勝が言った。

「結局はな、民の暮らしを知らぬ者に、民のための改革など出来ぬということだ。父の新法だとして、突き詰めて言えば慶暦の改革※の焼き直しに過ぎなかった。取り立てて新しいものではなかったのだ。この国の指導者というものはな、そうやって口先だけで議論し、いざ実行するとなると、とたんに逃げ腰になって反対するのだ。士大夫などと大きなことを言っておる者の多くは、所詮その程度のものだ」

※螻蟻 けらとあり。

※慶暦の改革 仁宗の代に、范仲淹を中心として企てられた政治改革運動。

官の人心一新を目指し、綱紀肅正を唱えたが成功しなかった。

九天玄女はそう言って、遠くを見るように窓の外に目を遣った。そうしている、やはり相当の年齢に見えないこともなかった。

「だからな、私はもう士大夫や廷臣などあてにしないのだ。民を救う者は民から出る。私はそう悟ったのだ。十五年前、この入雲竜に出会ってからはな、ますますその思いを強くしたのだ。そして、三年前の宋家村への襲撃とその後の宋雪華の活躍。実はな、私は宋雪華の父宋

江、そして祖父宋湛を知っていたのだ。宋湛は若い頃から江湖で名を馳せていてな、その正義感に富んだ行動と独自の飛鏢の腕で、四十を過ぎた頃には押しも押されぬ江湖の大立者になっていたのだ。私は一時、宋湛に世のため立ち上がるよう説得したのだが、宋湛はついに応じなかった。その息子の宋江も傑出した男だった。父譲りの飛鏢に加え剣の修練にも力を入れて、宋湛亡き後江湖の期待を一身に集めておった。だが、惜しむらくは宋湛以上に内に向かう性格だったため、私の話など始めからとりあおうともしなかった。宋湛の築いた宋家村を、守ることが出来ればそれでいいと思っていたのだ」

「だが、守れなかった」

公孫勝が静かに言った。どこか、自らの一族と重ね合わせているような口振りだった。

「そうだ。本当に民の幸せを考えるなら、自分という小さな枠で考えるはならぬのだ。人は一人で生きているものではない。そして、自分だけの幸せなど、所詮砂上の楼閣に過ぎぬのだ。そうした時に、天殺の星よ、おまえが現れたのだ。私はこれ、この時遷から宋江の一人娘が生き延びたことを聞いていたのでな、おまえをその娘の守護者になるように送ったのだ」

九天玄女は、供の一人に目配せした。

「私は時遷と申します。さきほど九天玄女様のおっしゃられた通り、父の代から仕えさせていただいております。私は宋江様、そして宋雪華様を見守らせていただきました。あの襲撃は、たまたま私が他の用でいなかった時に起きてしまいました。真に残念なことと言うしかありませんでした。遼兵の賊が近くに来ていたのは知っていたのですが、まさかあんなに早く宋家村を襲うとは思っていませんでした。私の不覚です。宋雪華様には、いずれ謝らなくては思っております」

時遷はそう言って、黄玉に向かって頭を下げた。三十の前半と思われた。細身だが、無駄のない筋肉が全身を覆っているように李達には見えた。いかにも身ごなしが素早そうだった。間諜としての腕の他に、もう一段奥の仕事にも関っているような印象だった。おそらく暗殺。そ

う思って時遷を見ると、そのような雰囲気は漂わせていないものの、動きの一つ一つに神経が行き渡っているのが垣間見えた。

「時遷の父は、私が使っていた者達の頭領を務めていた。それで今も、五十人ほどいる諜者達の束ねとなっている。素質は父親以上でな、身が軽いことから鼓上蚤※という綽名がついている。特に忍び込みの達者でな、私は地賊の星と呼んでいる」

※鼓上蚤 太鼓の上の蚤。それだけ身軽だという意味。

九天玄女の言葉に、李逵が口を挟んだ。

「玄女様、その天の星だの地の星だのは、一体何のことなのですか」

九天玄女は、こころなしか微笑んだように見えた。

「私の夢。私の希望。もう二十年も前から想像していたのだ。いつか、民の中から現れて、この世を民のために変革してくれる、そういう者達を思い描いていた。ずっとな。その者達を星に喩えているのだ。だから、別におまえ達が気にする必要はない。私とその者を見て勝手に名付けているだけだ」

「そんなことで決めておるのですか」

李逵の声は不満そうだった。

「人は大なり小なり夢のために生きている。明日をも知れぬ者でも、今日の糧を夢見て生きているものだ。私が夢を見て悪いということはないだろう。天の星三十六、地の星七十二、併せて百八の星だ。李逵、おまえも天の星の一人だ。公孫勝も、この娘もな」

「儂はそんな星とは関係ない。儂はただ、嬢さんとこの若者達を死なせたくないだけだ」

「それが星の巡り合わせなのだ。人の持つ百八の煩惱。おまえ達百八の星が、それを拭い去ってくれることを祈る」

「百人の煩惱などと。まるで釈教※の教えみたいだ」

李逵は納得しかねるといふ顔つきだったが、それ以上反論しなかつた。

※釈教 仏教。

「わたしも……ですか」

黄玉が不安そうに訊いた。

「そうだ。おまえは天貴の星、そう私は見た。天魁の星を想う、その一途で純粹な心。おまえこそ天貴の星に相応しい」

「雪華姉様が天魁の星なのですね」

「宋雪華こそ天魁の星。百八の星を束ねる魁の星だ。宋湛、宋江、私は宋家の者に期待していたのだ。今にしてやっと、私の夢が叶いそうだ。宋湛も宋江も、個人としての見識や力量には十分なものがあつた。だが、世の不正を糾し、民の幸せのために立ち上がるという気概が足りなかった。それに比べ宋雪華は父を殺され、自らも悲惨な目に遭い、目を背けたくなるような世の醜さを、その心と身体で経験している。宋雪華は必ず立つ。そしてそれこそが私の、いや、民の希望となるのだ」

九天玄女はどこか遠い目をして、窓からさす陽の光に目を遣った。

「私は……」

公孫勝が口を開いた。

「玄女様の言われていることが分からないでもない。何か、大きな転機が訪れようとしているのを感じるのだ。もちろん、星のことなど私には分からないが、そう、天が回り地が動くといったような、そんな得体の知れぬ蠢動のようなものを感じるのだ。何かが起こりつつある。それが何かは判然としないのだが」

公孫勝は一息にそう言って、李逵に頷いた。

「儂には分からん。儂の頭はそんな高等なことを考えるようには出来ておらん。今はただ、目の前の困難をどうやって乗り越えるかを考えるだけだ」

李逵はまた溜息をついた。

「天殺の星よ。おまえはそれでよいのだ。おまえの役割は、天魁の星の妨げになるものを打ち払うことなのだから。おまえは、宋雪華に害をなすものに、容赦なく斧を揮えるな」

「それはそうだが」

「なら、よい。あまり考え過ぎないことだ。考えるのは、天魁の星や天間の星に任せておけ。いずれな、天機てんきの星が現れるはずだ。そうな

れば、考えることは天機の星がするだろう」

「まるで考えるなと言われているみたいだ」

「そんなことはない。おまえは考えてここに来たではないか。天魁の星はいまだ目覚めてはいない。他の星もな。だから、おまえが考えることは大切なのだ」

「何だか、褒められているのかげんかよく分かんが、とにかく儂は、ここを乗り切らねばならん」

「そのための入雲竜だ」

九天玄女が公孫勝を振り返った。

「墨家が守城戦の専門家なのを忘れたか。城壁ではなく砦ではあるが、入雲竜よ、出来るな」

「はい。墨家の誇りに賭けて。ただ、永くもたすことは出来ません」

「どれくらいもつ」

訊いたのは李逵だった。

「敵の数そして質にもよりますが、およそ二十日。こちらの数によっても多少の誤差は出ますが、それが限界でしょう」

「そこまでもつのか」

「もたせませす。宋雪華殿の傷はそれまでに治るはずです。それが二十日。そこまではこの公孫勝、命に換えて」

公孫勝の身体が急に大きく見えた。別人のような気を放っていた。かけがえのない味方を得た。李逵はそう感じた。